

研究ノート

外国人留学生に対する入学前教育の意義と課題

下岡 邦子

キーワード：三つの接続、入学前教育、外国人留学生、人材育成像、学習姿勢

1. 大学教育における「三つの接続」

これまでの大学教育では、専門教育の充実こそが取り組むべき最大のテーマであった。もちろん、その点は現在も変わっていない。しかし、学生の学力低下が問題となるなか、大学教育が取り組むべき課題として、新たに、他機関・他教育との「接続」が加わったといえる。この「接続」には大きく三つのものがある。一つ目は、高校から大学への接続、つまり「高大接続」と呼ばれるもので、これには「高等学校教育と大学教育が断絶している」という問題意識がその背景にある^[1]。二つ目は、大学から社会への接続であり、これは「キャリア教育」という枠組みで対応されることが多い。そして三つ目は、大学教育間での接続、つまり「科目間接続」である。文部科学省は、2015年に策定された『高大接続改革実行プラン』において、すべての大学に対し「三つのポリシー」（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）の策定・公表を義務づけた。その結果、各大学（学部・学科）にとって、カリキュラム全体の構成の明確化、さらには各科目の関連性の明確化がより重要な課題となっている。

これらの「三つの接続」のうち、初年次教育が担うのは「高大接続」と「科目間接続」であるといえる。そして、「高大接続」と「科目間接続」を円滑に進めることで、大学教育後半にある「キャリア教育」につなげていく、というのが、現在の大学教育が目指すべきカリキュラム像であろう。

さて、初年次教育が担う「高大接続」と「科目間接続」の一環として、近年多くの大学で導入されているものに入学前教育がある。入学前教育とは、大学が入学予定者に対し、大学へ入学するまでの期間に実施する講座や課題（教材）のことであるが、その対象者は日本人学生であることが多い。その一方で、外国人留学生を対象とした入学前教育を実施している大学（学部・学科）はあまり見られない。しかしながら、入学者の多様化が指摘されるなか、外国人留学生への入学前教育の意義を検討することは、これからの大学教育にとって重要なことだといえる。

以上のことを踏まえ、本稿では、神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コース（以下「GC 学部日本語コース」という。）が2021年度入学者を対象に実施した入学前教育を一例として、外国人留学生に対する入学前教育の意義や、実施によって見えてきた課題について考察する。

2. 入学前教育の目的

入学前教育の目的には「高大接続」と「学生把握」の二つがある。前者は、その名のとおり、高等学校教育と大学教育の接続に主眼を置いているが、入学前教育による「高大接続」として、さらに「入学予定者の学習意欲の維持 (a)」と「入学予定者の学力の補強 (b)」という二つの目的があるといえる。このうち、(a) の目的については、大学の入試形態の多様化がその背景にある。近年、AO 入試や指定校制推薦入試など、入試形態の多様化が進み、各大学には、いわゆる「前半入試」での合格者が一定数存在することとなった。前半入試で合格となった入学予定者は、大学に入学するまでの期間が長い場合で5ヵ月程度あり、その期間の学習意欲の維持が大きな課題となる。したがって、大学（学部・学科）は、入学までの数ヵ月間、入学予定者の学習意欲が維持されることを目的として、講座や課題（教材）などの入学前教育を実施する。また、(b) の目的については、学生の学力低下の問題と、そして、いわゆる「2018 年問題」^[2]と呼ばれる 18 歳人口の減少がその背景にあるといえよう。18 歳人口が減少し、高等教育進学者の絶対数が減っていく現状では、大学での学修に対応できるだけの学力を有しないまま入学する新入生の存在を想定しなければならない。そして、大学（学部・学科）としては、そのような新入生を放置するのではなく、円滑に大学での学修に取り掛かれるよう、新入生に対して何らかの支援を検討する必要がある。その支援の一つとして入学前教育がある。つまり、入学するまでの期間に、大学（学部・学科）が入学予定者に対して様々な講座や課題（教材）を提示し、それらの学習を通して、入学予定者が大学での学修に対応できるだけの学力を養成するのだ。このように、入学前教育は、「高大接続」という観点から、大きな役割を果たすものであるといえる。その一方で、入学前教育には「学生把握」という別の目的があることも忘れてはならない。

「学生把握」とは、入学者がどのような学習動機や学習姿勢を持っているかを事前に大学（学部・学科）が把握することである。入学者が多様化するなか、充実した初年次教育を展開するためには、事前の「学生把握」が大変重要だといえる。この「学生把握」については、近年、各大学の学習支援センターや初年次教育機関が入学時に「新入生アンケート」等を実施することで情報を収集し、入学者の学習に対する意識や姿勢などの傾向の把握に努めている。このような全学的な「新入生アンケート」の実施による「学生把握」は、当年度の入学者の傾向を掴むうえで重要なものであるといえる。しかし、その一方で、「新入生アンケート」には受験者である入学者の主観に頼った項目も多く見られ、入学者自身の「自己評価」である場合が多い。したがって、「新入生アンケート」等の調査が、入学者の学習姿勢などをどの程度客観的に測定できているかは、検証が必要だといえる。よって、より正確な「学生把握」を実現するためには、「新入生アンケート」に加え、別の方策も併せて実施する必要がある。そして、この別の方策の一つが入学前教育である。例えば、課題（教材）配付型の入学前教育では、入学予定者の課題内容（評価）の他に、課題の提出状況も知ることができる。つまり、入学予定者が計画的に課題に取り組めたかどうか、さらには、課題提出期

限を守ることができたかどうかなどの学習に対する姿勢を事前に把握することができるのだ。そして、これらの情報は客観的な事実であるため、「新入生アンケート」での入学者の主観的な判断とは異なった視点による「学生把握」が可能となる。

このように、入学前教育には「高大接続」と「学生把握」の二つの目的がある。この二つの目的のうち、どちらにより比重が置かれるかは、入学前教育を実施する大学、あるいは学部・学科の事情により異なってくるだろう。

その一方で、入学前教育を導入するうえで、すべての大学（学部・学科）が念頭に置くべき点もある。それは、大学（学部・学科）が掲げる人材育成像、あるいは教育理念である。先述のとおり、大学教育が果たすべき「三つの接続」は、個々に実行されるべきものではなく、大学（学部・学科）が掲げる人材育成像に適ったものとして、互いに連携して実行されるべきものである。そして、大学教育のまさに「入り口」といえる入学前教育もまた、その目的や実施内容などは、それを実施する大学（学部・学科）が掲げる人材育成像や教育理念に照らし合わせて選定されるべきである。

以上のことを踏まえ、次に、筆者が所属する GC 学部の日本語コース入学予定者に対して実施した 2021 年入学前教育について報告し、外国人留学生を対象とする入学前教育の発展性について述べたいと思う。

3. (GC 学部日本語コース) 2021 年入学前教育実施内容

3.1. GC 学部日本語コースが掲げる人材育成像

GC 学部日本語コースは、外国人留学生のみが所属するコースである。したがって、入学前教育の対象者も全員外国人留学生ということになる。しかし、対象者が日本人学生か、あるいは外国人留学生かということは、入学前教育を実施するうえで、それほど大きな違いはない。つまり、外国人留学生を対象として入学前教育を実施する場合も、その目的は「高大接続」^[3]と「学生把握」の二つとなる。だが、日本人学生に比べ、外国人留学生のほうが入学者の性質がより多様になることは否めない。例えば、日本語学習歴の違いや、出身地が漢字圏であるか非漢字圏であるかの違いなど、外国人留学生ならではの多様性というものがある。このような多様な入学者に対して実施する入学前教育では、学部（学科）が掲げる人材育成像がより重要になってくる。つまり、学部（学科）として明確な人材育成像を設定し、入学者が学部（学科）の掲げる人材育成像に適しているかどうか、また、もし適していないと判断された場合は、入学後どのような指導や支援が必要かを検討するために、入学前教育を実施するのである。したがって、まずは「学部（学科）が掲げる人材育成像に適った入学前教育とはどのようなものか」という視点で、入学前教育の実施内容を検討する必要がある。

GC 学部日本語コースでは、「日本で活躍してくれる外国人材の育成」^[4]を教育目標として掲げ、コースカリキュラムを構成している。特に、3 年次前期では 2 ヶ月間の企業イン

ターンシップを設定し、日本企業で働くための実践力の養成に取り組んでいる。そのため、大学教育前半である1、2年次においては、少人数クラスでの日本語教育を実施し、日本語力の養成はもちろんのこと、異文化適応能力の養成にも力を注いでいる^[5]。この際、重要と becoming するのは、学生一人一人の学習姿勢である。例えば、高い日本語能力を持っていたとしても、異文化としての日本の習慣や価値観を理解し、適応できる姿勢がなければ、卒業後、継続して日本企業で働くことは難しいだろう。また、柔軟なコミュニケーション能力があったとしても、与えられた業務を期日までに的確に処理する能力がなければ、日本企業で即戦力として活躍することはできないだろう。つまり、いかに高い日本語能力やコミュニケーション能力を持っていたとしても、柔軟で堅実な学習姿勢がなければ、「日本で活躍してくれる外国人材」にはなりえないということだ。このことから、GC 学部日本語コースでは、学生一人一人の学習姿勢を重視し、もし、その学習姿勢に不十分さが見られる場合には、教員が十分な時間をかけて丁寧に指導を行う。

このように、GC 学部日本語コースでは、コースとしての人材育成像を明確に設定したうえで、それに沿ったカリキュラムを構成し、学生の指導にあたっている。よって、入学前教育についても、特に「学生把握」に比重を置き、入学前教育対象者（入学予定者）がどのような姿勢で教材や課題に取り組むかを確認するためのものとして実施した。

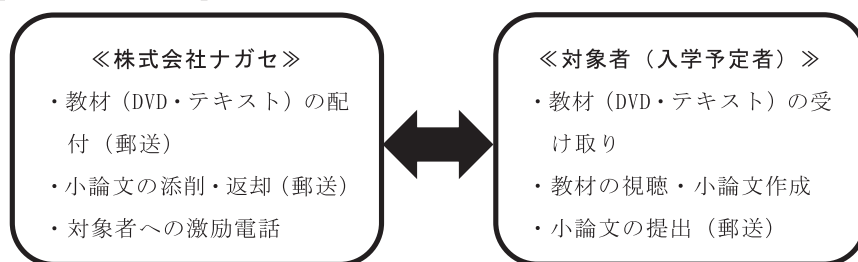
3.2. 入学前教育の概要

GC 学部日本語コースの2021年入学前教育は、株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」を採択し、以下の内容で実施した。

- ・対象者：前半入試合格者（中国人7名、ベトナム人2名、インドネシア人2名の計11名）
- ・期 間：2021年1月下旬から2021年3月下旬までの2ヵ月間
- ・教 材：大学教養基礎講座 表現力基礎（全10講座（1講座90分）、小論文作成4回）

株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」は、映像教材（1回90分の講座）の配付を基本とし、対象者はその映像教材を受け取り視聴する、というのが基本的な流れである。

【入学前教育の流れ】



また、株式会社ナガセでは、教材の配付や課題（小論文）の添削・返却の他に、「激励電話」という独自の取り組みも実施している。この「激励電話」とは、株式会社ナガセが入学前教育対象者に電話をかけ、教材到着の有無や教材に対する感想、課題取り組みの進捗状況を確認するために実施されている。このような取り組みを行うことで、入学前教育対象者（入学予定者）の孤立を防ぎ、対象者が前向きに教材や課題に取り組むことができるようにしている。また、「激励電話」の実施によって、大学（学部・学科）が入学前教育対象者（入学予定者）の学習姿勢を把握することも可能である。例えば、株式会社ナガセから提供される「激励電話」の記録を見ることで、入学前教育対象者が期日を守って課題を提出したかどうか、配付された教材に対してどのような感想を述べたか、また、株式会社ナガセからの「激励電話」にきちんと応対できたかどうかなどを確認することができる。このように、「激励電話」の実施は、入学予定者の学習意欲を維持するだけでなく、大学（学部・学科）が入学時に把握しておくべき入学者情報を得ることもできる。

3.3. 教材選定の基準

株式会社ナガセの「入学前準備教育」では、77の教材^[6]が提供されている。その中から教材を選定するにあたり、GC 学部日本語コースで重視したのは次の三点である。

- ① 外国人留学生の日本語学習につながるような内容であること
- ② ①の場合、非漢字圏出身の外国人留学生にとっても取り組みやすい内容であること
- ③ 課題は、学力の有無ではなく、意欲や努力の有無によって作成できるものであること

上記のうち、①については、まさに「高大接続」の視点であるといえる。GC 学部日本語コースに入学する外国人留学生のほとんどは、大学入学前に日本国内の日本語学校に在学し、そこで高等教育機関への進学準備を行っている。よって、大学への進学が決まってから大学へ入学するまでの間も、入学予定者が学習意欲を維持しながら、継続して日本語の学習に取り組めるような教材にしようと考えた。

しかし、送られてきた教材が入学予定者にとって難しすぎるものであれば、入学予定者の学習意欲は下がり、継続的な日本語学習とはならない。特に、非漢字圏出身の入学予定者にとって、例えば、難易度の高い語彙が多く出てくる文章読解などは、大変な負担となるだろう。これらのことを考慮し、GC 学部日本語コースでは、②のように、漢字圏出身の外国人留学生はもちろんのこと、非漢字圏出身の外国人留学生であっても取り組みやすい内容のものを入学前教育の教材とすることにした。

そして、②にも関連することだが、GC 学部日本語コースでは、③についても重点を置いて教材の選定にあたった。③に重点を置く最大の理由は、入学予定者の学習姿勢の把握にある。つまり、入学前教育対象者が意欲を持って努力すれば必ず完了できる内容の教材を配付し、その教材に対して、入学前教育対象者がどのような姿勢で取り組んだかを確認するのだ。これは、入学前教育の「学生把握」に相当する視点である。

GC 学部日本語コースでは、以上①②③の基準により、株式会社ナガセが提供する教材のうち「大学教養基礎講座 表現力基礎（以下「表現力基礎」という。）」を実施教材として選定した。

3.4. 教材の内容

GC 学部日本語コースが 2021 年入学前教育の教材として選定した「表現力基礎」は、映像教材（講師による講義）とテキストが対象者に配付され、実施期間中に 4 回の小論文作成がある。映像教材は全 10 講座で構成されており、1 講座は 90 分間である。90 分間というのは大学の講義 1 コマ分に相当する長さであり、この「90 分間」という時間設定には、映像教材（講師による講義）の視聴を通して、入学予定者に大学での授業時間の長さを体感させ、それに慣れてもらう、という狙いもある^[7]。

さて、「表現力基礎」の達成目標は、「日本語で表現するための基礎的な技術」の獲得である。よって、各講座では、アイデアの探し方や情報のまとめ方など、小論文を作成するにあたって必要となる基礎的な技術について、講師（1 名）が黒板に板書しながら解説していく。また、講座では、受講者に対して、ノートを準備し講師の板書を写すよう指示がある。このことにより、受講者である外国人留学生は、日本語でのノートテイキングについても練習することができる。

さらに、「表現力基礎」で特徴的なのは、各講座の最後に提示される課題の内容である。全 10 講座のうち、6 講座では次の三つの課題が設定されている。

- ・書き写し：講師が読み上げながら板書する文をノートに正確に書き写す。
- ・聞き書き：講師が読み上げる短い文章を一言一句正確に聞き取り、文脈を考えて正しい漢字に書き直す。
- ・聞き取り：講師が読み上げる長い文章を聞き、話の要点を理解する。そして、講師が読み上げる文章に関する設問に答える。

また、10 講座すべてに「漢字課題」として、カタカナを漢字に直したり、漢字の読みをひらがなに直したりする課題も設けられている。

これらの課題については、テキストの末尾にその解答が示されているので、受講者は自ら解答を確認することができる。つまり、意欲があればいくらかでも学習できるような構成になっているのだ。

日本で生活する外国人留学生の場合、日常生活において日本語を話す機会は比較的多くあるといえる。その一方で、日本語の文章を聞き、それを正確に書き写す、という機会にはあまり恵まれていない。このような現状を踏まえ、GC 学部日本語コースでは、外国人留学生に対する入学前教育として「きちんと聞いて、正確に書く」という作業を重視した。この「きちんと聞いて、正確に書く」という作業は、実に単純なものであるが、単純であるがゆえに、その作業から得られる技術の重要性に気づいていない外国人留学生は意外に多い。だ

が、この「きちんと聞いて、正確に書く」という地道な作業で得られる素養は、将来日本企業に就職し、そこで正確かつ迅速に業務を遂行するためには大変重要なものである。よって、GC 学部日本語コースでは、外国人留学生に対する入学前教育の課題でも、「きちんと聞いて、正確に書く」という作業を重視した。

また、非漢字圏出身の外国人留学生が持つ漢字に対する苦手意識も考慮し、それらが少しでも解消できる方策として、毎回漢字練習が課題として設定されている点も重視した。

そして、この教材のまとめともいえるべき課題は、小論文作成である。先述のとおり、「表現力基礎」では4回の小論文作成が課されている。入学前教育対象者は、講座を視聴したのち小論文を作成し、事前に設定されている期日までに指定された方法で小論文を提出する。入学前教育対象者が作成した小論文については、株式会社ナガセが添削したのち、本人に返却されるとともに、その評価（ABCD）が大学（学部・学科）に報告される。なお、小論文は以下の視点で評価される。

[A] 論理的に説明できている。

[B] 概ね説明できているが、少し説明に不足がある（[A] には一歩及ばない）。

[C] 論点がずれている。

[D] 小論文に不備が見られる（指定した字数の9割に達していない、など）。

以上のように、GC 学部日本語コースが選定した「表現力基礎」は、多様な性質を持つ外国人留学生であっても、彼らが持つ意欲と努力によって取り組むことができる内容のものと見える。そして、このような「意欲と努力の有無」に左右される教材に対して、入学予定者がどのような姿勢で臨んだか、という点を GC 学部日本語コースでは注視した。

3.5. 結果

1) 成績評価と受講姿勢

2021年にGC 学部日本語コースが実施した入学前教育の実施結果（小論文の提出率および評価）は以下のとおりである。

・提出率：90.9%（11名中10名が提出）

・評価：[A] 2% [B] 43% [C] 55% [D] 0%^[8]

上記の結果からもわかるように、今回、入学前教育の対象となった入学予定者11名のうち、10名がすべての小論文を期日までに提出することができていた。このことから、ほとんどの入学予定者が、教材に意欲的に取り組めたことがわかる^[9]。その一方で、小論文の評価については、半数以上が[C]評価となっている。今回教材として選定した「表現力基礎」は、もともとは日本人学生を対象に作成されたものであるから、外国人留学生にとっては少し内容面で難しい部分があったと推察される。

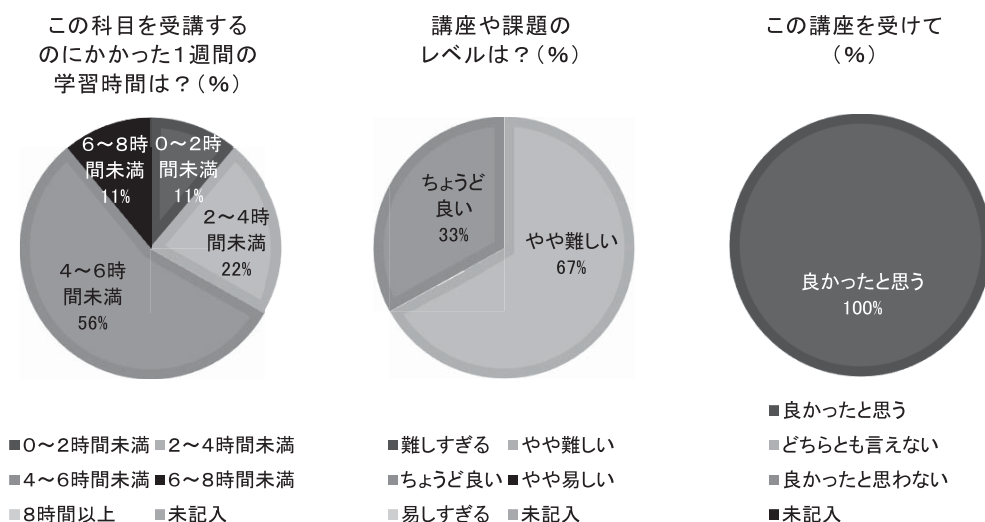
次に、入学前教育対象者の受講姿勢について見ていく。先述のとおり、今回の入学前教育では株式会社ナガセから提示される「激励電話」の記録により、各対象者の教材への取り組

み姿勢を確認することができる。対象者への「激励電話」は、教材到着時の1月下旬と入学前教育期間中盤の2月下旬、そして、入学前教育期間終盤の3月下旬の計3回行われる（もし未提出課題がある場合は、4回5回と電話の回数が増えることもある）。今回、GC学部日本語コースの入学前教育対象者に関しては、すべての小論文が期日までに提出されていることから、上記のような4回以上の「激励電話」というものはなかった。それに加え、特筆すべきは、「激励電話」が2回で終了している対象者の多さである。今回、4回の小論文を提出した10名のうち7名が、2回目の「激励電話」のときには既にすべての小論文提出を終えていた。つまり、1月末に教材が届いてからおおよそ1ヵ月間で10講座すべてを視聴し、小論文課題を終えたということになる。これはこの後のアンケート結果の「学習時間」にも表れているが、今回の入学前教育対象者の多くは、かなり集中的に教材や小論文作成に取り組んだことがうかがえる。

また、「激励電話」の記録には入学前教育対象者との通話内容も示されている。例えば、「映像授業を繰り返し見ることができるので理解しやすかった」や「日本語が母語ではないので、講座の内容が少し難しかった」などの映像教材に対する感想や、「課題はすべて終わった」といった学習の進捗状況、さらに「激励電話」担当者からの学習に関するアドバイスなど、「激励電話」において入学前教育対象者とのどのようなやりとりが交わされたのか、その内容が示されている。また、「応答がなく、電話がつながらなかった」といった通話の有無についても「激励電話」の記録には明記されている。今回、GC学部日本語コースの入学前教育対象者の「激励電話」の記録を見てみると、期日までに小論文を提出した10名のうち8名は、担当者からの「激励電話」に対してその都度適切に対応し、自身の学習状況や映像教材への感想などがきちんと述べられていたことがわかった。また、残り2名については、1回目の「激励電話」には対応しているものの、2回目と3回目の「激励電話」には応答がなく、電話がつながらなかったとの記録が明記されている。このような入学前教育対象者の「激励電話」に対する対応の有無、あるいは対応の際のやりとりの内容から、入学前教育対象者の他者に対する応対力やコミュニケーション能力を読み取ることができる。そして、例えば、今回途中で「激励電話」への対応を止めてしまった入学前教育対象者2名については、その情報を教員間で共有する必要がある。そして、その情報も念頭に置いて、入学後の学生指導に当たる必要があるといえる。

2) アンケート結果

株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」では、全教材完了後に受講者に対してアンケート調査が行われる。GC学部日本語コースが実施した2021年入学前教育では5項目についてのアンケート調査が行われた（回答率は81.8%（11名中9名が回答））。今回はその中から、入学前教育対象者の「学習姿勢」を見るために、次の3項目の結果に注目したい^[10]。



まず、「この科目を受講するのにかかった1週間の学習時間は？」という質問に対しては、「4～6時間未満」と回答した入学前教育対象者が56%と最も多く、次いで多いのが「2～4時間未満」で、22%であった。また、「講座や課題のレベルは？」という質問に対しては「やや難しい」が67%、「ちょうど良い」が33%で、その他の回答はなかった。この二つの項目からわかることは、入学前教育対象者が一定の時間をかけて教材に取り組んだという点、そして、入学前教育対象者がある程度の手応えを感じながら教材に取り組んだという点である。対象者に提示する教材は、内容が難しすぎると対象者の学習意欲を損ない、また、易しすぎても成長や遣り甲斐を感じられず、継続した取り組みにはつながらない。よって、「ちょうど良い」あるいは「やや難しい」と対象者が感じるレベルの教材を提示することが重要であるが、今回、GC学部日本語コースで実施した入学前教育ではその点がクリアできたといえる。そして、この2項目の結果が、「この講座を受けて良かったと思う」という回答が100%になる、という結果につながったのだといえる。

4. 入学前教育の成果と課題

以上、2021年にGC学部日本語コースで実施した入学前教育の内容や結果について述べた。ここからは、今回の入学前教育によって得られた成果や課題について述べたいと思う。まず、今回の入学前教育の成果の一つとして、大学教育の「入り口」としての役割が果たせた点が挙げられる。この研究ノート執筆時において、既に2021年度の前期授業が終了しているが、今回、入学前教育の対象となり、4回の小論文を提出した10名の外国人留学生は、入学前教育での取り組み同様、前期授業においても大変優秀な学修成果を残している。つまり、入学前教育に取り組むことで、入学までの一定期間も学習意欲を維持しながら過ごすことができ、入学後も、大学での学修に円滑に移行できたのだと考えられる。また、教員の立

場からも、今回の入学前教育の結果は大いに参考になるものである。特に、入学前教育対象者の「激励電話」の記録は、それぞれの学生の学習姿勢や学習計画がわかるとともに、他者に対する応対力も窺い知ることができる。これらの情報は、入学後の学生指導にも大いに役立つものだと考えられる。

一方、課題もある。今回の入学前教育での一番の課題は、入学前教育対象者の小論文評価の低さであろう。入学前教育の目的は「高大接続」と「学生把握」であるから、入学前教育対象者（入学予定者）の課題の出来そのものは、大きな問題とはならない。しかし、これらの評価を踏まえ、それを大学教育のカリキュラムに活かしていくことは必要だろう。今回のGC 学部日本語コースの入学前教育では、そこまでのことができていない。今後は、入学前教育対象者が実際に提出した小論文の内容を分析し、そこから外国人留学生が抱える課題を見つけ出し、それらの課題が解決できるようなコースカリキュラムを検討・修正していく必要がある。これらのことは今後の課題としたい。

[注]

1. このような問題意識から、文部科学省は2015年に『高大接続改革実行プラン』を策定し、全国の高校および大学において「高大接続改革」が推進されている。
2. 「2018年問題」とは、2018年を境に18歳人口が減少し続け、それに伴い大学をはじめとする高等教育機関への進学者数も減少する現象のことである。文部科学省は2018年に公表した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」において、18歳人口減少を踏まえた多様な大学教育の在り方を示している。
3. ただし、外国人留学生の場合は、日本人学生とは違い、高等学校ではなく国内外の日本語学校での日本語教育を経て大学へ進学することが多い。したがって、GC 学部日本語コースにおける外国人留学生にとっての「高大接続」とは、「日本語教育と大学教育との接続」ということになる。
4. 神戸学院大学（2020）p.146 参照。
5. GC 学部日本語コースは1学年の定員が30名という小規模なコースであるため、少人数クラスの設置や、学生一人一人に対するきめ細やかな指導が可能となる。
6. 2020年10月29日現在。
7. 日本の高等学校同様、日本国内の日本語学校においても、その多くが1コマ45分で授業を構成している。したがって、この「90分間の講座」という時間設定の狙いは、外国人留学生にも有効なものだといえる。
8. 各評価の割合については、提出者数全体（10名×4回＝40名）を100%とし、そのうちABCD評価がそれぞれ何割を占めているか、という観点で示している。
9. 今回、小論文が未提出となっている入学前教育対象者1名については、引っ越しによる住所変更のために、教材が対象者へ到着しなかったという事情があった（株式会社ナガセからの報告による）。よって、この場合の未提出を「対象者（入学予定者）の学習意欲の低さ」と評価することには慎重であるべきだと考える。
10. なお、その他二つの項目は「映像授業を何で受講しましたか」「講師の教え方は？」という内容のものであった。

【参考文献】

- 岩井洋（2018）「内蔵型の初年次教育——カリキュラムに初年次教育をいかに組み込むか」初年次教育学会〔編〕『進化する初年次教育』世界思想社，pp.68-76
- 栗原由加（2019）「外国人留学生と企業を結ぶ実践的な日本語・キャリア教育」神戸学院大学『學報.net』<https://www.kobegakuin.ac.jp/gakuho-net/infocus/2019/01.html>（2021年9月21日閲覧）
- 神戸学院大学（2020）『地域と繋がる大学 震災から何を学んだか』中公新書ラクレ 683
- 株式会社ナガセ／東進ハイスクール（2021）『2021年神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部入学前準備教育結果報告書』
- 文部科学省（2015）『高大接続改革実行プラン』
- 文部科学省（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」『文部科学白書 2018』